

このころから寒さが厳しくなっている。箱館・五稜郭で冬籠城した経験のある中野にとっては山口の寒威など大したことはないと思うのだが。

二十六日湯田の井上馨邸の下見のために赴いている。井上大蔵大輔は中野を抜擢した上司であるが、中野に自分の旧居を提供しようとしているのである。大変な厚遇である。中野も気に入ったようで「眺望よろしく頗得意ナリ」と日記にはある。

初代山口県令中野梧一の生涯

井上邸の近くの矢原に井上と親友である吉富簡一（藤兵衛）が住んでいる。もと山口宰判大庄屋であり、元治の内戦では謹慎中の井上馨を担いで鴻城軍を組織したことがあり、土籍を得ている。維新後中央の官吏になるつもりで小菅県大属などになっているが、廃藩置県とともに帰県した。のち井上馨が退官して興した先収会社に参加、大阪店の頭取として活躍、初代県会議長、代議士などをつとめた。矢原將軍の別称がある。先に井上が中野を紹介した手紙を紹介したが、それは吉富宛のものであった。中野は井上邸を見に行ったついでに吉富に会っているが、「小才氣アル者ト見受ケタリ」という感想

を記している。

「高杉老人宅」とは、高杉丹治（小忠太）であろう。旧藩時代は小姓役をはじめ世士付、直目付などをつとめ、維新後は藩大監察、権大参事になっている。長男が尊王攘夷派の指導者の高杉晋作である。

この日杉民治もやってきているが、高杉晋作の父の家で、吉田松陰の兄とともに「馳走」になりながら歓談しているわけ、かつての敵である幕臣としてはどういう感慨を持ったであろうか。また高杉や杉はそれぞれ最愛の子や弟が仇敵とした旧幕臣を快く迎え、その治政に積極的に協力しようとしているのであるが、どういう気持であったらうか。

高杉丹治は藩情とくに財政に明るく、かれの助言が中野にとっては大いに役立ったのであろう。また杉民治が長州藩きつての民政通であることが中野にとっては当面重要であったと思う。かれの県政は二人のベテラン吏僚の助言に支えられて開始されているのである。

高杉丹治は明けて一八七二年（明治五）一月二十二日付で県庁御用掛に任じられている。いわば最高顧問格である。そ

明治初年の山口町推定図



中野梧一は左下の井上馨邸から県庁まで馬に乗って出動していた  
藏重善兵衛宅、竹田祐伯宅、吉本群平宅、片山喜八宅は推定

新発見、山口時代の日記  
日本近代史解明の鍵

初代山口県令  
中野梧一日記

田村貞雄校注

マツノ書店



九日 晴

午前七時山口より飛脚来ル。佐賀県参事森長義来翰封入ス。曰、要用アリテ馬関へ出張スト。又三瀧県参事モ同道之よしナリ。桂讓介江面晤を乞、其上生等も同県之情を晰、相談いたし度趣、依而勝間田を呼ニ遣ス。時宜ニ寄り、馬関へ出張を命スル等。奥平謙ヨリ一書を得。則前原一誠方より之案内に付、即人力車に而相越ス。奥平・茅原・勝間田・佐々木同席ナリ。一誠江対シテ曰、九州北方紛擾之景況ニ依而、人心恟々タリ。今足下管下士民之属望スル処に付、鎮静保護之事、恟ニ足下に依頼ス。且朝威不振時は士民之属望スル者を以、長トナシ。二州ヲ保護スルニ他ナシ。振テ可諭。一誠曰、頗嫌疑多シ。在朝人ニ怨ナキニアラスト雖、国家之大事におよび、私怨を以、時機を失シ、士民方向を失シ候而は、不忠ノ名を不免、依而生ノ依頼を以、保護之任を助力スベシト約。畢而小酌。勝間田一同会議所に至リ、戸長を会シ、鎮西之近況を談シ、且鎮静保護之任を一誠江託スト演説シ、旅亭江戻リ、晚餐を認。七時萩を発シ、明木ニ至リ、九時桂讓介ニ面会ス。其前桂ニ命シ、馬関江相越、佐賀・三瀧之参事に会シ、山口江来リ、談話スベシト勸引候様相合、差遣ス。其出掛ナリ。勝間田ハ帰萩を差留タル不平を鳴ス。呵々。明木を発シ笹並之間より強雨。山路困セリ

二月九日 一 佐賀県参事森長義。73・8・12任命。黒龍会編『西南記伝』下卷之二(黒龍会本部 一九一一年)によれば、佐賀にいた香月経五郎は新権令岩村高俊が鎮台兵を率いて赴任するとの報を聞き、森参事にこれを知らせたところ、驚いた森は事前に岩村に会うため後事を香月に託し小倉に赴いたという。しかし実際は、香月ら「征韓」派の言動に驚いた森が東京から赴任する新権令岩村高俊と事前に打ち合わせるため、下関に急行したのであろう。二「明治初期三瀧県治資料」(福岡県史資料)第一輯 一九三二年)によると岡山県士族水原久雄。71・11・14任命。(官員録74版)でも三瀧県参事は水原久雄。しかし馬関にやつてきたのは、権参事塩谷良

翰と中属五十川中ではないかと思われる。塩谷良翰述「回顧録」(塩谷恒太郎 一九一八年)二九〇ページ、今津健治「佐賀の乱と三瀧県」(「久留米郷土研究会誌」四号 一九七五年)、「久留米市史」第三卷の「土族の反乱と久留米」の節。なおこの項については久留米市立図書館および「久留米市史」第三卷の關係箇所の執筆者深谷真三郎氏の御教示をえた。記して感謝の意を表する。三九州に派遣した密偵桂讓介。四 九等出仕勝間田稔。五 奥平謙輔。六 この記述で萩に人力車があつたことが確定される。七 戸籍掛(少属)茅原信行。八 佐々木男也。九 防長二州、すなわち山口県のこと。一〇 萩部におかれた戸長の連絡合議機関。部署にかわる機能を果たした。二 阿武郡明木村。三 九州に派遣した密偵桂讓介。三 下関に来ている佐賀県参事森長義と三瀧県参事塩谷良翰。四 阿武郡佐々並村。

十日 雨

払曉帰宅。竹田を呼、碁を囲。九時出庁。中村・進・正木・福島等を会し、曠昔一誠江約セシ件を談シタリ  
 鎮西探偵を議ス。吏人をして方向を定めしむ  
 ○ 邏兵を大ニ募集セリト内務省へ建白ス  
 ○ 広島鎮台へ小銃を千、彈藥三十万を借用セシヲ乞ふ。又兵を出スベシト、進十六を差シ演説セシム  
 ○ 正木江金一百万を託シ、萩へ遣ス  
 ○ 中村を馬関へ遣シ、豊浦江県庁之決スル処を説キ、又鎮西之模様を探索シ報知センタメナリ  
 ○ 松田・福島・原田之三名を二州巡回セシメ、俗史之処置少シヲ寛ナラシメ、民情ヲ安カラシムル為メナリ  
 ○ 在県大尉を呼、馬関へ行軍セシム  
 ○ 在県他より来ル俗史を論シテ、帰国セシム



## 良質な史料と優れた伝記

東京大学史料編纂所所長

宮地 正人

このたび、山口県初代県令中野梧一の日記が、マツノ書店から翻刻・出版されることとなった。日記の解読者は、地租改正事業をはじめとして、明治初期の山口県史研究に着実な業績をつみ重ねてきた田村貞雄氏である。田村氏の研究対象への恐るべき執念が、この日記を発見させ、懇切丁寧な注釈を伴った活字化を実現させたのだといえよう。また日記史料を扱う際、最も我々を当惑させる多数の人名に関しては、可能な限りの文献を駆使した人名略伝が、ここには付されている。

明治維新は、今日にいたる日本近代を考える場合、さけて通ることが出来ない、古くて、しかもいつまでも新しくありつづける歴史学の対象である。そして、そこでの大きな問題群の一つが、明治初年の天皇制国家による上からの近代化政策と、在地においてそれを受けとめ、反発し、更に逆規定していく諸勢力・諸集団との、力にみちダイナミズムに富んだ相互関係なのである。

この両者のぶつかりあう場はどこであったのか？それは、太政官政府部内でも、個々の町村でもありえなかった。それは廃藩置県後新たに成立した府県そのものだったのである。全国の県令や権令・参事の一身にこの矛盾と対立は凝集される。しかも山口県の場合、県令の立場は一地方官にとどまるのではなく、維新変革を遂行した長州藩閥の出身県として、その県治は直ちに全国的な意味をもたざるを得なかった。

ここに活字化された明治四年一二月から七年七月の中野日記の中に、我々は、中央政府の指令と県の複雑な対応、天皇制教化政策と文明開化思想、地方行政区画の創設・改変と豪農層の掌握、県行政を担う実務家集団の形成と不平士族への対策等々、この時期に提起されてきた種々多様な問題と課題を考える際の貴重なヒントとアイデアを随処に見出すことが出来る。中野が全力をあげて遂行した地租改正事業が、佐賀の乱勃発直後の明治七年二月、始めて政府の認可するところとなる事実も、その一例である。

また田村氏は、幕府勘定方の家に生れ、函館戦争に旧幕臣として参加、井上馨に見出されて新政府の官僚となったものの、県行政に困憊して実業界に投じ、明治一六年に自殺する中野梧一の二〇〇ページ近くの波瀾にとんだ伝記を本日記に付している。これ自体が一つの魅力的な維新論となっている。

良質の史料と優れた伝記は維新史研究の命である。本書はその一つである。推薦する所以である。



## 中野梧一日記の刊行を喜ぶ

名城大学名誉教授

明治維新史学会顧問

原口 清

明治維新は、その激動の渦中のなかで、波乱に満ち、魅力あふれる生涯を送った多くの人物を生みだして

いる。山口県初代県令であった中野梧一も、そのなかの一人である。

旧幕臣であった彼は、戊辰の内乱では反政府軍に身を投じ、箱館・五稜郭で最後の抵抗を試み、降伏・赦免の後は一転して旧敵長州藩の後に新設された山口県の初代長官となる。初期明治国家の中堅官僚として新時代の建設に参加した彼は、やがて官を棄て実業界に身を投じ、関西財界に大きな足跡を残す。ほどなく、謎の自殺をとげて四一歳の生涯を終わっている。まさに、劇的な人生と云えよう。

中野梧一の日記は、過去にもその抄録が世の関心を引き論議的となったことはあったが、今回、田村貞雄氏の厳正な考証を経てその全ぼうが明らかにされることになった。田村氏は、明治維新研究の第一線で活躍をつづけており、中野梧一研究の第一人者である。今回の中野日記の解題には、最高の適任者である。

刊行される中野日記は、一八七二（明治五）年前半と七四年前半を中心とするもので、中野の山口県長官時代のものである。この時期は、廃藩置県直後の最も激動的な時期であり、矢継ぎ早に発令・実施される政府の諸政策に対し、士族・農民等の反応がさまざまな形をとって噴出した。地方統治の責任者として直接管下の人民に対応する地方長官の役割は、安定した時代のそれの比ではない。

この日記は、限られた時期と地域ではあるが、地方長官のうごきを中心として、国家と人民の関係を具体的にかつ立体的に解明するための貴重な史料となる。これまで類書が無かっただけに、とくにその感が深い。

日々の日記に登場する人物・事件等には、綿密な注が付けられている。さらに、精緻な「解題」・「人名略伝」・「中野梧一の生涯」が別に収められている。痒い所に手が届くような懇切な配慮である。これらは、基礎的文献をあまねく渉猟し、厳密な検討を加えた末に作成されたものであり、実証に徹する田村氏の学風が遺憾なく発揮されている。とくに「生涯」は、中野梧一伝の最高水準を示す傑作と云える。

本書は、中野梧一および関係人物・事項を研究する為の必読の書であるばかりでなく、明治維新をより深く知る為の示唆に富んだ良書である。広く利用されることを希望し、推せんしたい。



### 中野梧一日記 略目次

一 中野梧一日記 解題	3
二 中野梧一日記	23
三 関係人物略伝	287
四 初代山口県令中野梧一の生涯	349
①さまざまな中野梧一伝 ②齋藤家の系図	
③幕臣齋藤辰吉 ④維新動乱のなかで	
山口県への赴任 ⑥中野県政の展開 ⑦佐賀の乱への対応 ⑧実業家への飛翔と挫折	
五 各種中野梧一伝	528
津田権平編「明治立志伝」(第一編 中野梧一君小伝)ほか六点を縮小復刻	
六 中野梧一年譜	
七 中野梧一関係文献目録	

### 中野梧一(齋藤辰吉)略年譜

天保13年	辰吉、江戸に生まれる
文久3年	将軍家茂上洛に際し、従士として随行
元治1年	出羽国屋代郷の百姓一揆を鎮圧
慶応4年	鳥羽伏見の戦いに参加、前將軍慶喜水戸に謹慎し、辰吉も随行
明治2年	五稜郭の榎本軍降伏、辰吉軍使となる
明治3年	静岡鷹匠町に住む従弟・中野誘の附籍となり、中野梧一と改名
明治4年	新政府より山口県初代参事(県令職代行)に任命され、東京を出発(「中野梧一日記」はこの日から書き始められた)
明治5年	長門地方の農・漁村を巡視、全国に先駆けて、地租改正事業に着手
明治7年	山口県令に昇進
明治8年	山口県令を辞任
明治9年	大阪で、長州出身の政商藤田伝三郎の商社・藤田組に入社
明治10年	コレラの流行を予見、石炭酸の買い占めで一躍成金になったという
明治12年	藤田組横札事件起こり、藤田伝三郎とともに逮捕される
明治13年	大阪製銅会社の設立計画に参加
明治16年	大阪の自宅で自殺、四十一歳

▼維新の立役者であった山口県の初代県令(知事)に、数年前まで敵として戦った幕府方の要人が乗り込んできた。  
▼吉田松陰の兄、高杉晋作の父などに囲まれて、旧幕臣である初代県令・中野梧一が仕事をしている、この不思議な光景。  
▼彼は山口県在任中、明治四年から同七年に至る間、丹念に日記をつけていた。明治初年の地方官の日記は、全国的にもきわめて珍しく、貴重である。  
▼編者の田村氏がこの日記を発見して以来十余年。詳細な注釈や伝記を加えた本書は、明治維新史研究の新史料として大きな意味をもっている。

**■ 体 裁** A5判六〇〇頁  
クロス装・箱入  
**■ 定 価** 八、〇〇〇円(450)  
**■ 予約特価** 六、〇〇〇円(〒)  
**■ 特価締切** 95年6月20日  
**■ 発 売** 95年7月中旬

▼僅少数のため、売り切れのばあいはご容赦願います。  
▼書店へは卸しません。

〒740 徳山市銀座2  
電話083(2)1195  
**マツノ書店**